

岐阜県指定文化財・史跡

岩屋岩蔭遺跡

発掘調査報告書

2002年3月

岐阜県益田郡金山町教育委員会

岐阜県指定文化財・史跡

岩屋岩蔭遺跡

発掘調査報告書



岩屋岩蔭遺跡全景

序

岩屋岩蔭遺跡は、岩屋ダムに近い山の南斜面に所在する岐阜県指定史跡です。その昔、悪源太義平がヒビを退治したという伝説が残っており、現在は、その史跡も含め周辺に点在する巨石群が、古く縄文時代から人々の生活に大切な暦を告げる天文台として太陽や星を観察していた貴重な場所だったのではないかと、という調査も進められており誠にロマンに満ちた遺跡です。

今回の発掘調査では、縄文時代の早期や晩期の土器や石器が発見されており、この遺跡の利用は約8,000年前からあったことが解ります。土器は小片ばかりですが押型文土器と呼ばれるもので、作りや施文が丁寧でやや古い様相をしています。石器は石鏃が多く、岩陰を狩猟のためのキャンプ地として利用していたようで、こうした岩陰での発掘調査の事例が少ないことから見ても、縄文時代の社会を考える上で大変貴重なデータを得ることができたと思われます。また、この地方では非常に少なく、当町では初めてといえる弥生時代の遺物も確認されています。

これらの資料の数々から当時の岩陰における生活の一端が偲ばれ、考古学研究としてはもちろんのこと、学校教育や社会教育においても大変貴重な資料として活用が図られることと考えます。文化財は我々の祖先が残してくれた貴重な遺産であり、現代に生きる私たちは、こうした過去を振り返りつつ将来を見つめて行かなければならないと思います。

終わりになりましたが、今回の調査を指導していただいた県教育委員会当局をはじめ、直接調査に当たられた長屋調査員及び株式会社パスコ、さらには地元住民の方々など数多くの関係各位のご協力に対し謹んで深く御礼申し上げます。この報告書が文化財に対する認識及び郷土文化の発展につながることを心から願い、簡単ではございますが発刊のことばとさせていただきます。

平成14年3月1日

金山町教育長 清水 治

岩屋岩蔭遺跡発掘調査記録写真

岩屋妙見神社と
岩屋岩蔭遺跡（奥）



祖師野八幡宮主催による
発掘調査前の地鎮祭

トレンチ掘削作業の様子



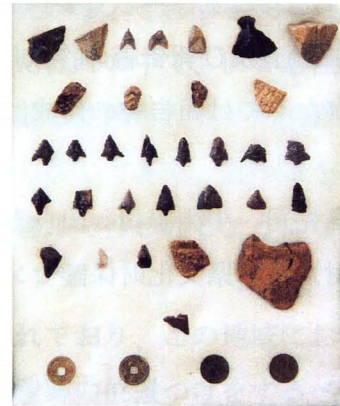
発掘調査時期 平成13年2月



トレンチ掘削後の土層面①



トレンチ掘削後の土層面②



出土した主な遺物



発掘調査後の現地説明会の様子

例 言

1. 本書は岐阜県益田郡金山町大字岩瀬字高平に所在する県史跡岩屋岩蔭遺跡（岐阜県遺跡番号 G22 K01033）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は2001年2月19日より3月2日の期間に金山町教育委員会が行った。長屋幸二が調査担当し、作業、測量、記録は（株）パスコに委託した。
3. 遺物の整理、報告書の作成には長屋幸二、富田真一郎が当たった。土器実測および2章は富田が担当し、それ以外は長屋が担当した。
4. 出土遺物は金山町教育委員会において保管している。
5. 発掘調査及び報告書の作成に当たって次の方々や機関から助言・指導を受けた。これらの援助がなくては報告書の作成はできなかった。記して感謝の意を表する。

（敬称略 五十音順）

大島晃司 小淵忠司 田口方一 藤田英博 三島 誠

（財）岐阜県文化財保護センターには、整理の場所などを提供いただいた。

目 次

1 調査にいたる経緯	1	6 遺構と遺物	7
2 立地と環境	1	（1）近世以降の遺物	7
3 岩陰の状況	3	（2）弥生時代の遺物	9
4 調査方法	5	（3）縄文中・後・晩期の遺物	9
5 層序	5	（4）縄文早～中期の遺物	15
		7 まとめ	16

1 調査に至る経緯

岩屋岩蔭遺跡は県内でも数少ない岩陰遺跡であり、岩陰の規模、状況、岩陰周辺的环境とも良好であることから1969年に金山町、1973年には岐阜県の史跡に指定されている。しかし、この岩陰がどのように利用されたのか、いつ頃利用されていたのか、といった詳細なことがらについては明らかではなかった。金山町では岩屋岩蔭遺跡を活用する可能性をさまざまな角度から探っており、2001年2月19日より遺跡の性格を把握するための考古学的調査を実施することとした。

1990年代の後半より、日本の先史考古学研究の中で社会システムの復元を目指す動きが活発になってきた。それ以降、遺物や遺跡などの物質文化に対する研究から、それらを残した地域社会の動態に対する研究へと問題意識が転換してきている。そうした流れの中で、旧石器社会から縄文社会、縄文社会から弥生社会へとといった社会の転換期に繰り返し使用されていた洞窟・岩陰遺跡がその地域社会で果たした役割について見直そうとする研究も進んできた。近年は土俗考古学的アプローチなど新しい観点を加えた岩陰・洞窟遺跡の調査が各地で行われるようになってきており、岩陰・洞窟遺跡研究はまさに転換期を迎えている。

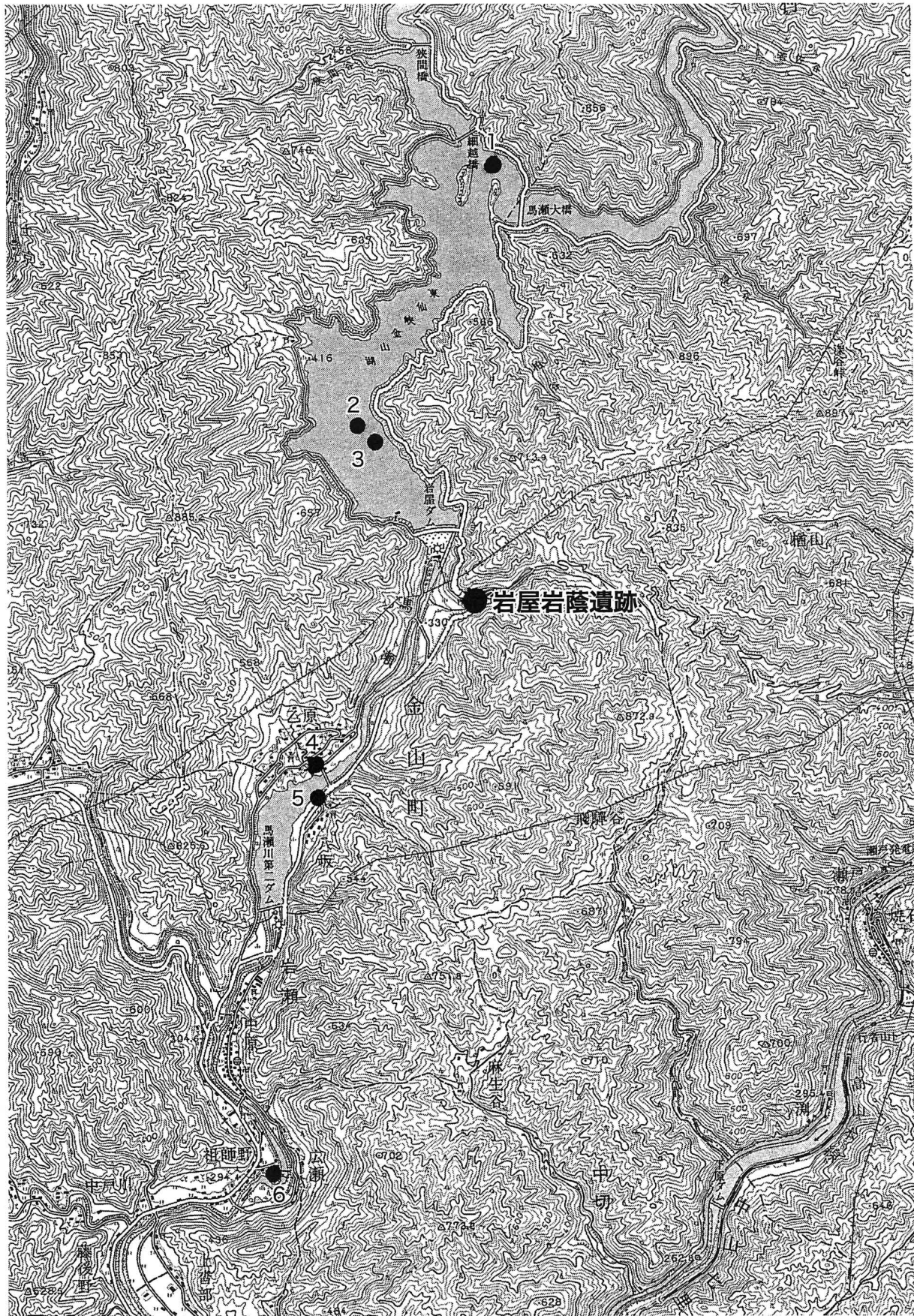
金山町内の馬瀬川流域では過去にいくつかの発掘調査が行われており、この地域における縄文遺跡のデータも蓄積されている。馬瀬川流域における岩屋岩蔭遺跡の位置づけをするべき素地も、いまだ十分ではないが整えられつつあるといえる。今回の調査目的は年代や包含層の確認などであるが、近年の問題意識に応えられるようなデータを収集するべく調査を行うこととした。

2 岩屋岩蔭遺跡の立地と環境

岐阜県金山町は県のほぼ中央部、飛騨地方の最南端に位置している。古代から飛騨川に沿って飛騨と美濃を結ぶ東山道飛騨支路の中継地となってきた。現在もJR高山本線、国道41号線が走り、国道沿いには旅行者らが足を休める施設などが立ち並んでいる。また、江戸時代には町の一部が郡上藩領に属しており、長良川水系と飛騨川水系を結ぶ重要な地域であったこともうかがわれる。金山町の形状は南北に長く、標高800m～1000mの山々が連なる間を飛騨川、馬瀬川などの河川が北から南へ流れている。豊富な水力を利用して大正年間より電源開発が進み、昭和48年には多目的ダムの「岩屋ダム」が馬瀬川に築かれ、東海地方の水源地域ともなっている。町域の9割を山林が占め、豊かな緑と清流に囲まれた美しい街である。

今回調査した金山町岩瀬高平にある岩屋岩蔭遺跡は、馬瀬川の支流妙見谷に面する山の南斜面に位置している。遺跡より300mほど下った辺りで妙見谷は馬瀬川に合流し、その南には岩屋の集落が営まれていた。岩屋の地名は17世紀中頃の正保郷帳から認められるが、岩屋ダムの建設によって集落は移転した。岩陰内には岩屋の人々によって岩屋神社（妙見神社）が祀られていたが、これも集落の移転とともに祖師野八幡宮に合祀された。

金山町内の遺跡の多くは飛騨川（益田川）・馬瀬川流域の河岸段丘上、近くに谷水か清水が湧



第1図 馬瀬川流域の縄文遺跡と岩屋岩蔭遺跡位置図

いている場所を選んで立地している。岩屋岩蔭遺跡の周辺にも多くの遺跡が存在し、昭和45年度から49年度にかけて岩屋ダムの建設に伴う岩屋ダム埋蔵文化財発掘調査が行われ、細越遺跡・卯野原遺跡・卯野原新田遺跡・乙原遺跡・八坂遺跡の5つの遺跡が確認された。細越遺跡では縄文早期の押型文土器が出土し、卯野原・乙原遺跡では複合住居址が明らかにされた（第1図）。また、岩屋岩蔭遺跡から10kmほど下流の馬瀬川河岸段丘上にある祖師野遺跡も昭和59年に調査された。縄文中期から後期にかけての土器とともに、石製土掘り具が突出した割合で出土している。このように馬瀬川流域の段丘は縄文時代の遺産を集約し、堅持し続けてきたと言えるだろう。

一方、弥生時代になると遺跡は激減し、これまで金山町内では発見されていなかった。隣の萩原町上呂では銅鐸も見つかっているが、飛騨川流域の弥生時代について資料がきわめて少ない状況にある。古墳時代についてもやはり資料は少ない。

地元には岩屋岩蔭にまつわる伝承も残っている。平安末期、保元の乱で敗れた源氏の悪源太義平が金山町に逃げてきて、金山町麻生谷で兵を募り、当時村人を苦しめていた大狒々を岩陰で討ち取った。村人たちは歓喜し、岩陰に妙見様を祀ったというものである。

岩屋岩蔭遺跡周辺の遺跡と主な出土物（番号は第1図に対応）

1	細越遺跡	縄文早期の押型文土器、打製石鏃・ナイフ形石器(?)など
2	卯之原遺跡	住居址、立石遺構、縄文中期の土器、打製石鏃・石皿など
3	卯之原新田遺跡	住居址、縄文中期の土器、打製石鏃・石皿など
4	乙原遺跡	住居址、縄文中期の土器、打製石鏃・石棒など
5	八坂遺跡	住居址、打製石鏃・石錘・石棒など
6	祖師野遺跡	焼礫、縄文中期から後期の土器、石製土掘り具など

3 岩陰の状況

岩屋岩蔭遺跡は岐阜県益田郡金山町大字岩瀬字高平に所在する。妙見谷に刻まれた平均23度の急峻な谷地形の南側斜面に位置し、標高約380m、谷からの比高差約15mとなっている。岩瀬、岩屋という地名に表れるように、岩屋岩蔭遺跡の周辺にはいたるところに巨石がみられる。中でも、谷底に近いところには大小さまざまな流紋岩質溶結凝灰岩が群在している。これらの巨石は東、すなわち妙見谷の上流に向かってインブリケーションをみせ、谷による堆積であると考えられる。岩屋岩蔭は流紋岩質溶結凝灰岩と濃飛流紋岩の巨石の上に、北から濃飛流紋岩の巨石が庇状に覆い重なって形成されている。これら岩陰を構成する巨石は石の種類も堆積方向も谷底付近のものとは異なっており、山からの崩落によるものと考えられる。

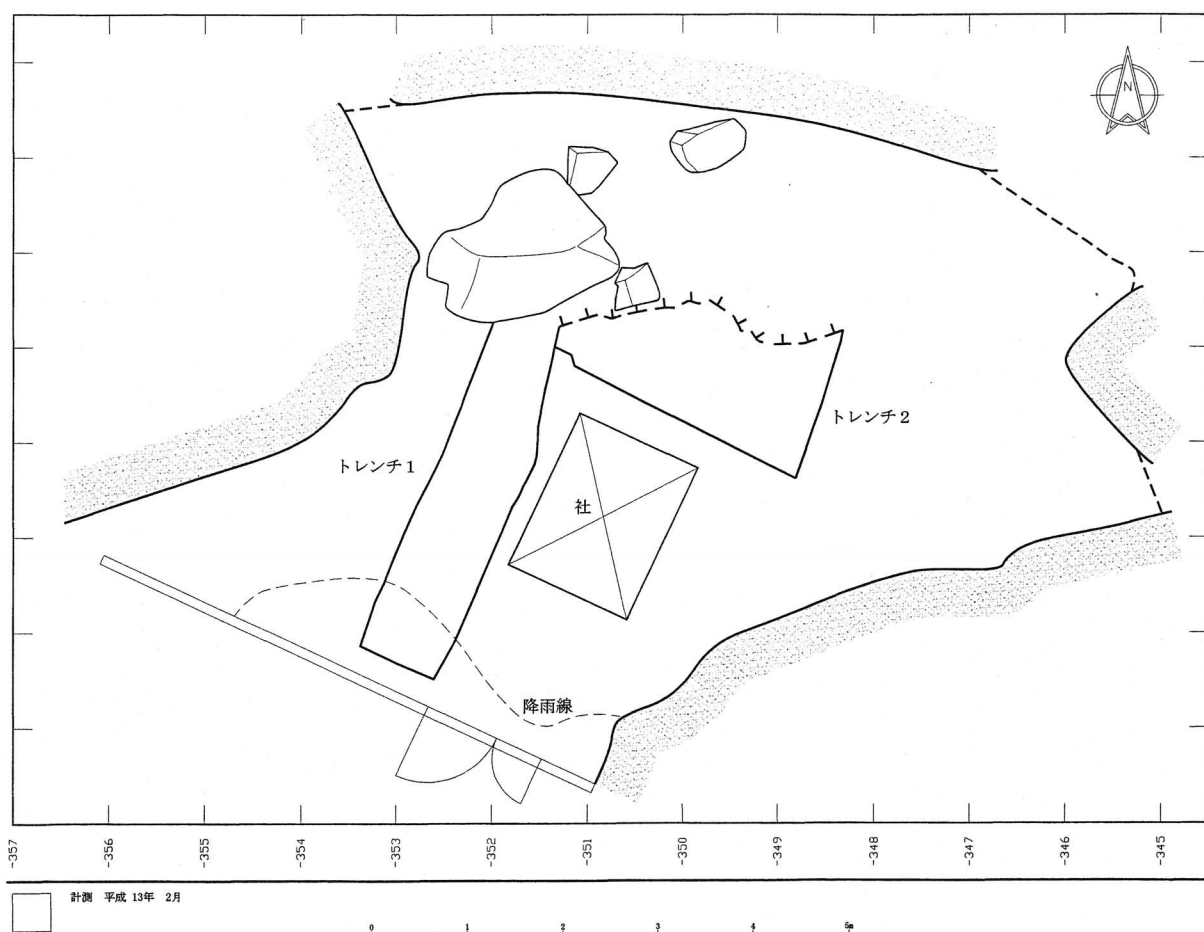
調査時、径5～8cmほどの木根が東西方向に多く走る様子が観察された。岩陰内にはこうした根を伴う木や株は見られないことから、岩陰外の木の根であると考えられる。したがって、岩陰

を構成する巨石は現地表面からそれほど深くないところに乘っている状態であると考えることができよう。

岩陰は南南西方向に開口しており、奥行き6.9m、間口6.2m、最大幅は奥壁際で8.4mと平面形では奥ほど広い（第2図）。しかし、天井岩が奥に向かって約40度の角度で下がりそのまま奥壁となるため、最奥部は高さが確保できない。

奥壁の左右など巨石の間から岩陰内に土砂の流入が観察されるが、土砂の供給は制限され、流入土の堆積は薄い。岩陰には明治以前より妙見神社が祀られており、現在は岩陰内に平坦な面が形成されている。しかし、もとは斜面地でありこのテラスは造成によるものである。

昭和47年岩屋ダム建設に伴う岩屋集落住民の移転により妙見神社は祖師野八幡宮に合祀されるが、社殿は岩陰内に残され、祖師野八幡宮の飛地境内になっている。社殿奥は3m×6m程の範囲で攪乱を受けている。岩陰遺跡の重要な部分がこの攪乱により大きく失われてしまっている。



第2図 岩陰遺跡の平面図

4 調査方法

テラス部分の造成、旧地形の確認を目的として、岩陰の主軸に沿った南北方向のトレンチを社殿の西に設定した。幅は1 m、長さは現テラス面の先あたりから巨石(2 m×1.6 mほど顔を出している流紋岩。表面に剥落が観察できる)までおよそ3.7 mである。これを1 トレンチとした。1 トレンチは整地面以下各層で精査をかけ、地山である黄褐色土まで掘り下げた。遺物包含層掘削後、西半分をさらに深掘りし、地山の堆積を観察した。

社殿奥には攪乱の範囲、包含層の広がりを確認するために東西2.7 m×南北1.6 mの調査区を設定した。これを2 トレンチとする。2 トレンチは整地層直下にわずかに縄文後期～晩期の包含層が残ることが確認でき、この層まで掘り下げた。縄文早期の層は掘削しないで残すこととした。2 トレンチのセクションは攪乱壁面の観察による。

出土遺物は縄文時代遺物包含層から出土した遺物については出土地点、出土レベルをトータルステーションにより記録し、採り上げた。

調査終了後、攪乱により掘り出された土も含めて埋め戻しを行い、攪乱を受ける以前の状態にほぼ復元した。

5 層 序

1 トレンチ西壁セクションを基に以下の通り層序区分し、2 トレンチ北の攪乱部セクションを対応させた。

I 層：現地表面。玉砂利が社殿の前面から左右にかけて敷き詰められており、岩陰の奥には広がらない。当層中より、こぼれた賽銭と思われる寛永通宝、一銭硬貨(大正五年、昭和十年)が出土している。

II 層：神社社殿を祀るためにテラス部分を造成した際の整地層をII 層とした。II a～II c 層に細分できる。

(II a 層) 褐色砂質土。黄褐色砂質土がブロック状にはいる。下の層とは不整合。

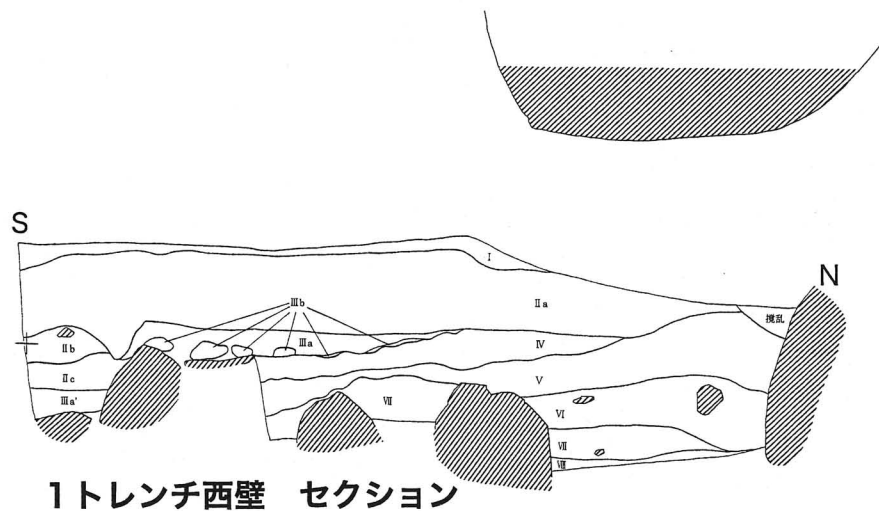
(II b 層) 暗褐色砂質土。旧テラス面より南に堆積する。

(II c 層) 褐色砂質土。旧テラス面より南に堆積する。

III 層：火をたいた痕跡。炭化物の堆積と焼土をIII 層とした。III a 層とIII b 層に細分でき、III a 層はさらにIII a' 層に細分される。旧テラス上の南端部には平坦な礫が水平方向に乗り、テラスからの落ち込みにはやや厚手の平坦な礫が垂直方向に立って出土している。これらの礫は人為的に、テラスの端を保護する目的で置かれたものであると考えられる。旧テラス面は現状より1 mほど狭かったようである。

(III a 層) 旧テラス上に堆積している炭化物層。当層下部より寛永通宝などが出土している。

(III a' 層) 旧テラスより南に堆積している炭化物層。当層中より播り鉢の底部破片などが出土し



第3図 調査区断面図

ている。

(Ⅲ b層) 赤化した焼土がブロック状に混じる灰褐色土。旧テラス上に残り、焼土ブロックは面的に密に広がり、原位置は保たれている。当層下部より弥生時代遺物が立位で出土する。

Ⅲ a層は厚いところでは20cm以上堆積しており、相当量の炭化物が残されている。集中的な燃焼行為が想定でき、日常的な火の使用ではなく儀礼的な行為によるものと考えられる。この炭化物はテラス下にも落ち、Ⅲ a'層を形成する。テラス下には焼土が残らず、火をたく行為はテラスの上でのみ行われたと考えられる。Ⅲ a'層が堆積した後、テラスを南に拡張するべくⅡ c層が盛られる。Ⅱ c層の上にもⅢ a層が若干被っており、火をたく行為とⅡ c層の整地の時間差はほとんどなかったと考えられる。したがって、Ⅲ層は整地に先立ち行われた儀礼により形成されたと考えられる。整地時期は近世である。

Ⅳ層：暗褐色土。縄文後期～晩期遺物の包含層。

Ⅴ層：褐色粘質土。上部に縄文早期遺物を包含する。当層は南側に大きく傾斜しており、山腹斜面の状態を反映している。岩陰内のテラスは発達していなかったようである。

Ⅵ層：褐色礫混粘質土層。

Ⅶ層：暗褐色粘質土層。巨礫角礫が入る。Ⅵ・Ⅶ層は色調異なるが漸移的である。1トレンチ西壁セクションではⅥ層に礫が密にみられるのに対してⅦ層には礫が少ないことから異なる堆積サイクルによる可能性も考えられることから分層した。しかし、2トレンチ北側のセクションではⅦ層にも礫が密に入り、Ⅵ層にかけて礫が漸移的に減少、小型化する級化作用が観察でき、一連の堆積ととらえられる。1トレンチは巨石の下手に位置していることから礫の供給が少なかったと考えるのが妥当であろう。

Ⅷ層：赤褐色粘質土層。Ⅵ層以下は自然堆積である。前述のように岩陰内は土砂の自然供給が少なく、これらの堆積は岩陰形成以前のものであると考えられる。岩陰外に設定したトレンチでもⅧ層に対応する層が確認されている。岩陰外の木根が岩陰内にまで入っていることも岩陰を構成する巨石が地中深くまで及ばないことを示している。

攪乱北側の壁面の観察から、岩陰奥ではⅤ層以上の堆積は薄く縄文時代の床面の高さは現況とさほど変わりがなかったことが確認された。巨石北側にある方形の割石の頂部が若干頭を出したか出さないか程度であったと考えられる。

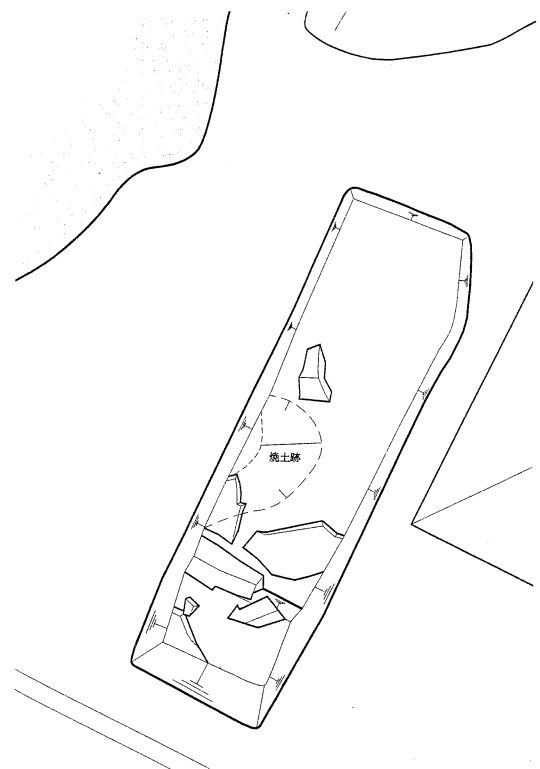
6 遺構と遺物

遺構としては江戸期の整地と、それに伴って火をたいた跡がみられるのみである。これについては層序の項で説明しているのでここでは繰り返さない。

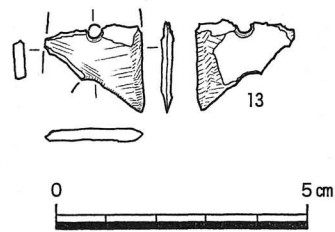
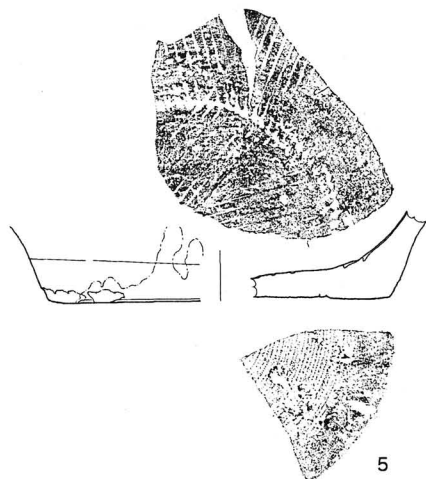
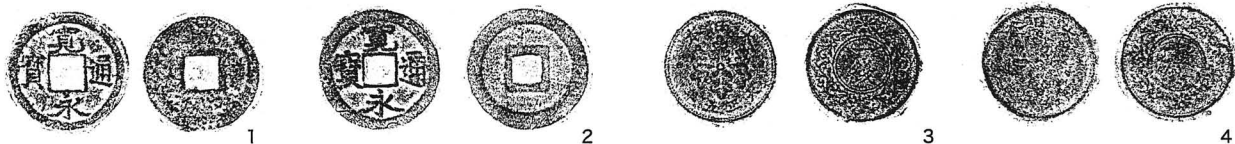
遺物は縄文土器、弥生土器、陶器、石器などがみられる。これらの遺物について、所属時期毎に説明していきたい。所属時期は層位的に把握できるものもあり、出土層位を重視したが、攪乱から出土したものなどは形態的特徴から判断した。また、出土層位と所属年代が明らかに異なりそうな場合は本文でその旨記述した。

(1) 近世以降の遺物（Ⅰ～Ⅲ層出土の遺物）

近世以降の遺物のほとんどは現表土である玉砂利層、Ⅲ a 層、Ⅲ a' 層の下部より出土し、整地層であるⅡ層からも若干出土している。玉砂利層からは貨幣が社殿前面・側面より出土した。奥では出土しないことから賽銭と考



第4図 整地層下面



第5図 I～Ⅲ層出土の遺物

えられる。1の寛永通宝、3の大正5年の1銭、4の昭和10年の1銭がそうである。

2の寛永通宝はⅢ a層より出土している。当層からは他に瀬戸美濃産の茶碗の小片が見つまっている。ほとんどが小片であるが、中に黒釉の碗の胴部に拳骨痕が付けられたものがみられた。これは拳骨碗と呼ばれるもので、18世紀後半以降出てくるものである。

5の播鉢は旧テラス南のⅢ a'層より出土した。底径は7cm程である。底部裏面には糸切痕が残り、底面の櫛目は放射状もしくはランダムに入れられる。体部の櫛目は体部下端より引き上げられている。使用によって播り目がつぶれる程に摩滅している。

(2) 弥生時代の遺物 (Ⅲ b層～Ⅳ層上部出土の遺物)

Ⅲ b層を除去する際に出土したものがほとんどであり、Ⅳ層上部にも若干みられた。1トレンチ南半部で出土するが、穿孔磨製石鏃のみ1トレンチ北部で出土している。ただし、1トレンチ北部には攪乱がおよんでおり、攪乱内出土の可能性もある。

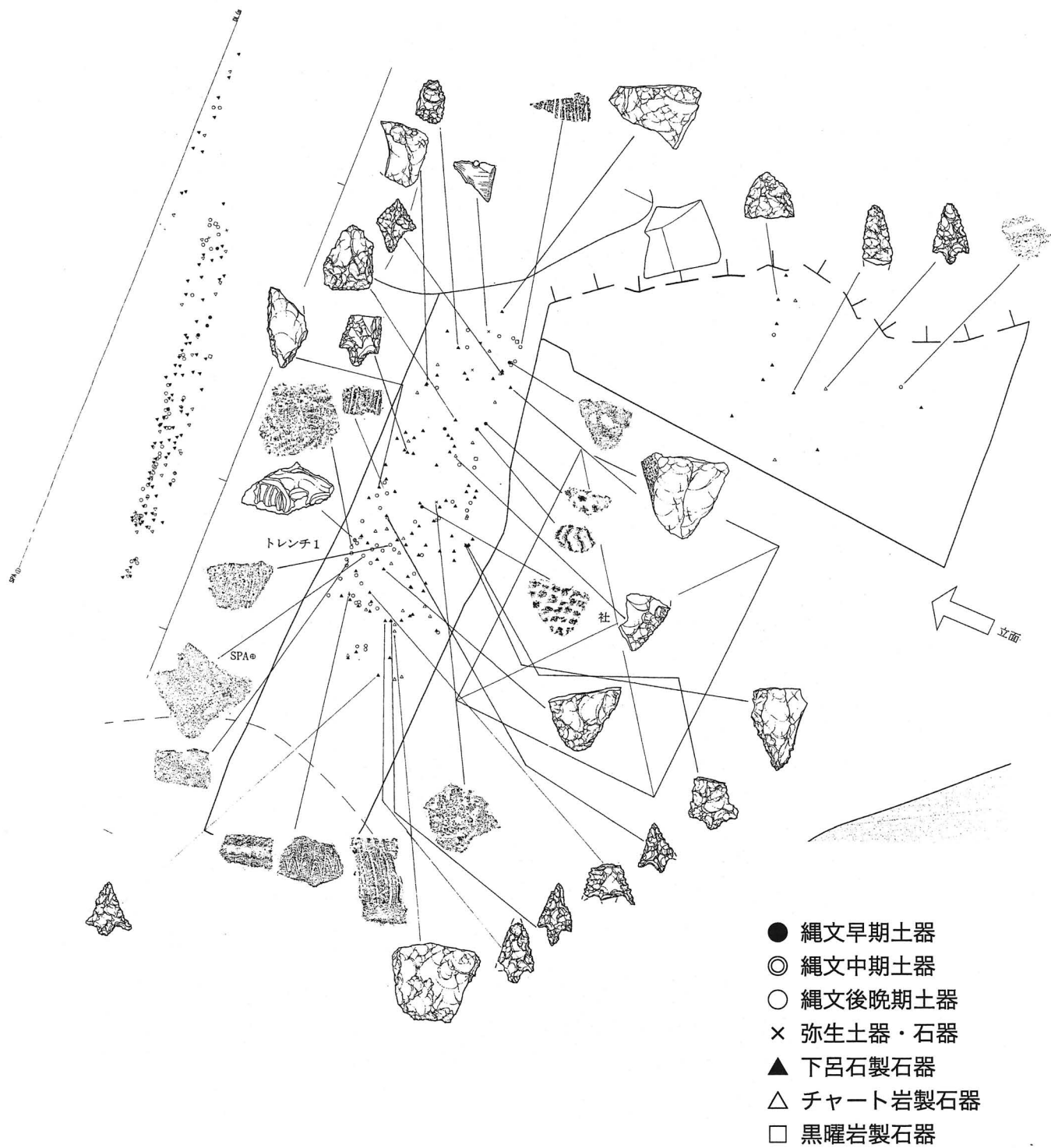
土器は時期を決定できない小片が多い。6～10・12はⅢ b層下部からよりまとまって出土したものである。6は口縁を肥厚させて端部を面取りし、外面・内面に櫛状の工具で刻みを加えている。高山市赤保木、丹生川村丸山遺跡などに類似資料があり、中期末頃に位置づけられよう。ただし、頸部に細かな条痕がみられ、濃尾平野の類例から後期初頭あたりまで下る可能性もある。7はやや受け口状の形態を呈し、外面に櫛状工具の描線が縦に走り、内面には丁寧にナデが施される。8・9は同一個体。胴部から急角度に屈曲して開く口縁部で、外面は櫛状工具で縦に施文されている。厚手で、胎土からも縄文土器であろうと考えられるが、出土状況からここでとりあげた。10は頸部破片。外面に櫛描きによる波状文がみられる。11は胴部片。櫛描きが丁寧に施され、外面に炭化物が厚く付着している。12は底部。指頭圧痕が内外面にみられる。これらの資料の中で、時期の特定が可能なのは6・10の2点であるが、いずれも中期末から後期初頭にかけてのものと考えられる。この位置づけについては近隣地域の年代観を援用したが、資料自体断片的であり、今後当地域の類例が増加すれば位置付けはより明確となるであろう。

13は穿孔磨製石鏃。幅19mm、上半部と片脚を折損し、片面は大きく剥落する。粘板岩の両面を研磨し、胴部下半に穿孔がなされる。

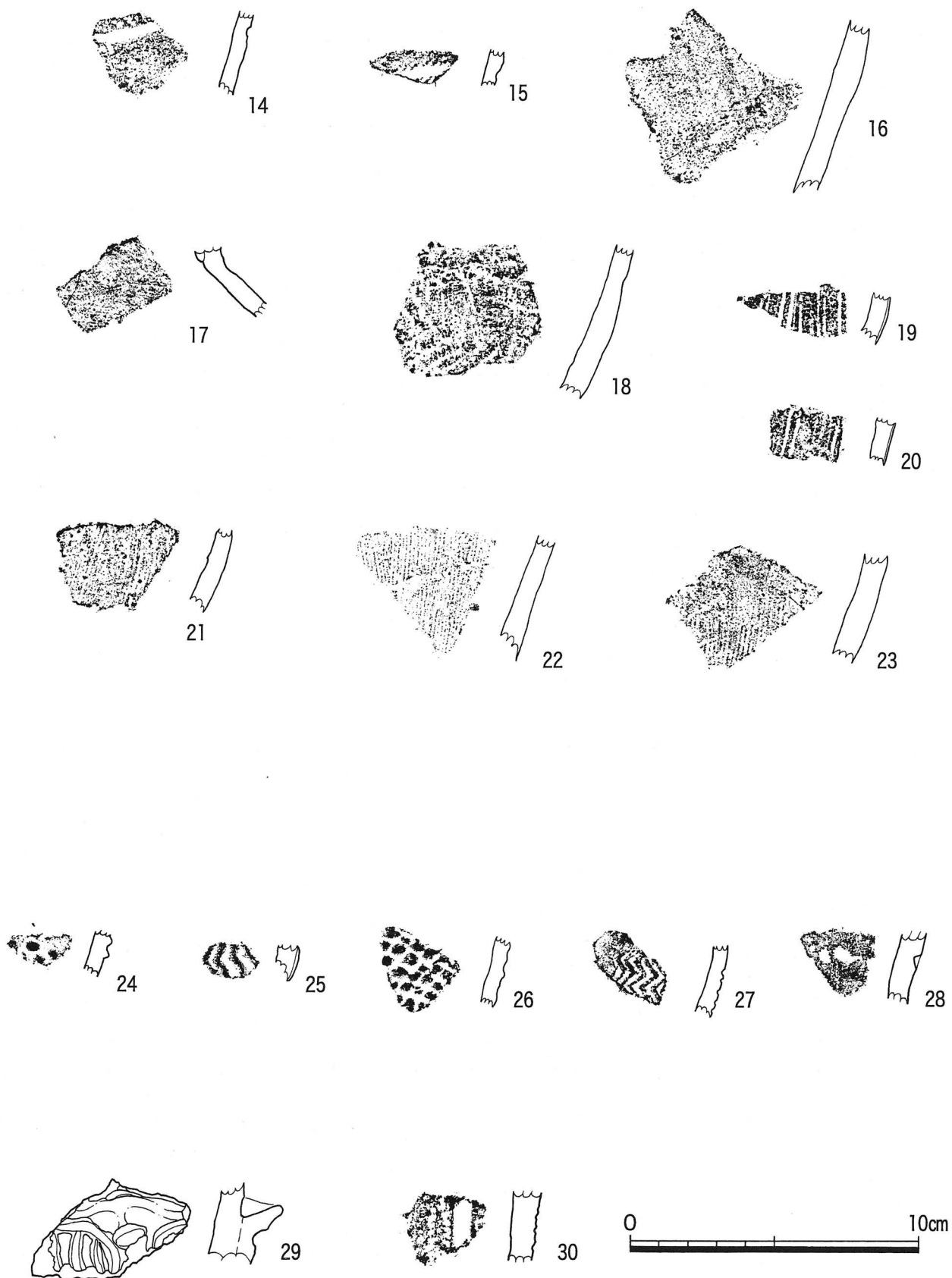
(6・10の年代的位置づけは藤田英博氏の教示による)。

(3) 縄文中・後・晩期の遺物 (Ⅳ層出土の遺物)

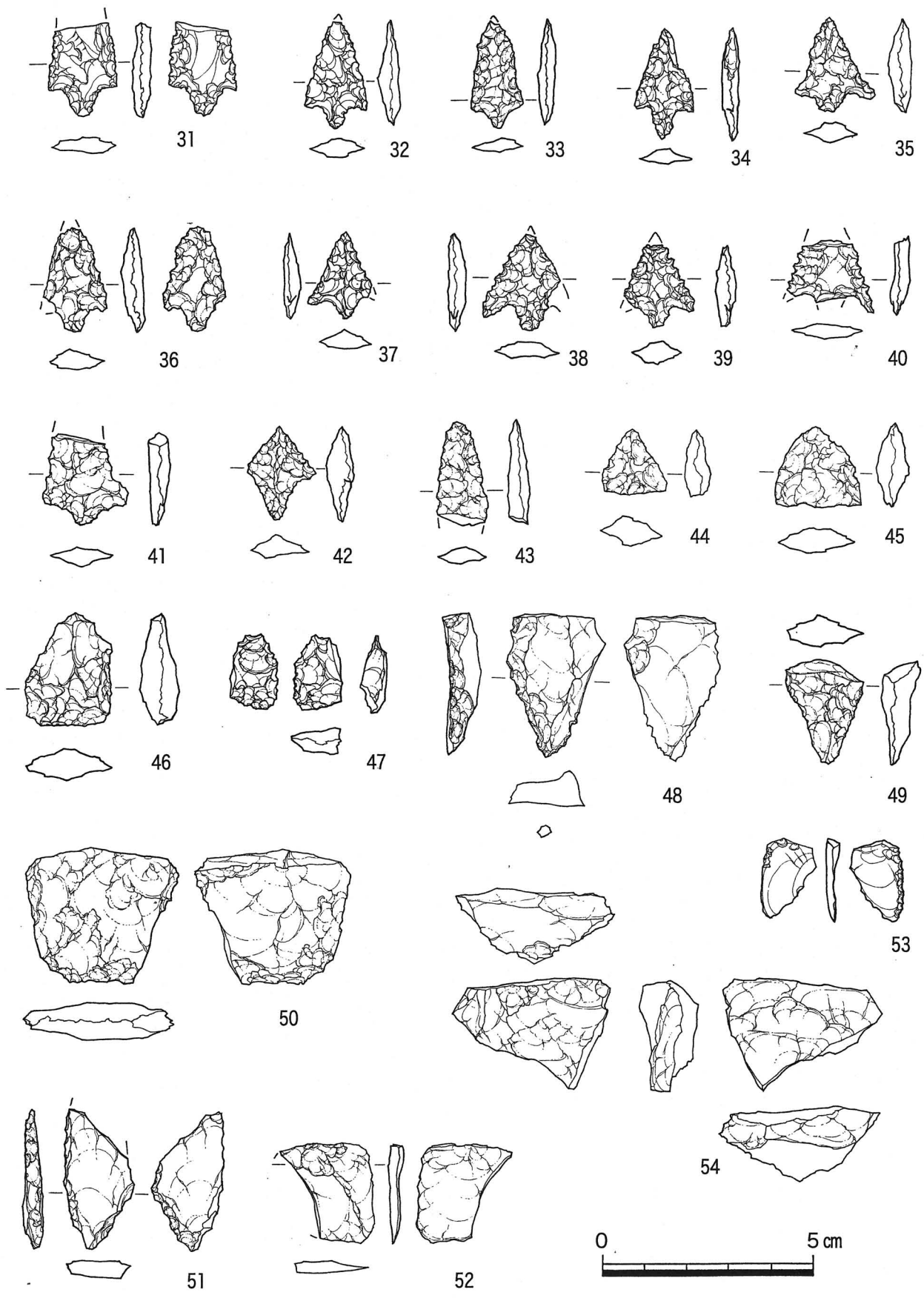
出土した土器片は小片が多く時期決定することは困難ではあるが、縄文後期～晩期のものと考えられるものが多かった。Ⅳ層より出土する。14・15は小片であるが、おそらく磨り消し縄文の一部であろう。どちらも薄手である。17は壺型土器の胴部から頸部にかけての破片と思われる。16・18は胴部片。16は無文、18は器面が荒れているが下部に縄文を転がしたような痕跡がみられる。19・20は竹管状工具により縦に施文されたもの、21～23は櫛状工具により縦に施文されたもので、胎土など当該期のものとは異なるが、Ⅳ層出土の資料でありこの項でとりあげた。



第6図 IV～V層 遺物出土状況



第7図 IV・V層出土の土器



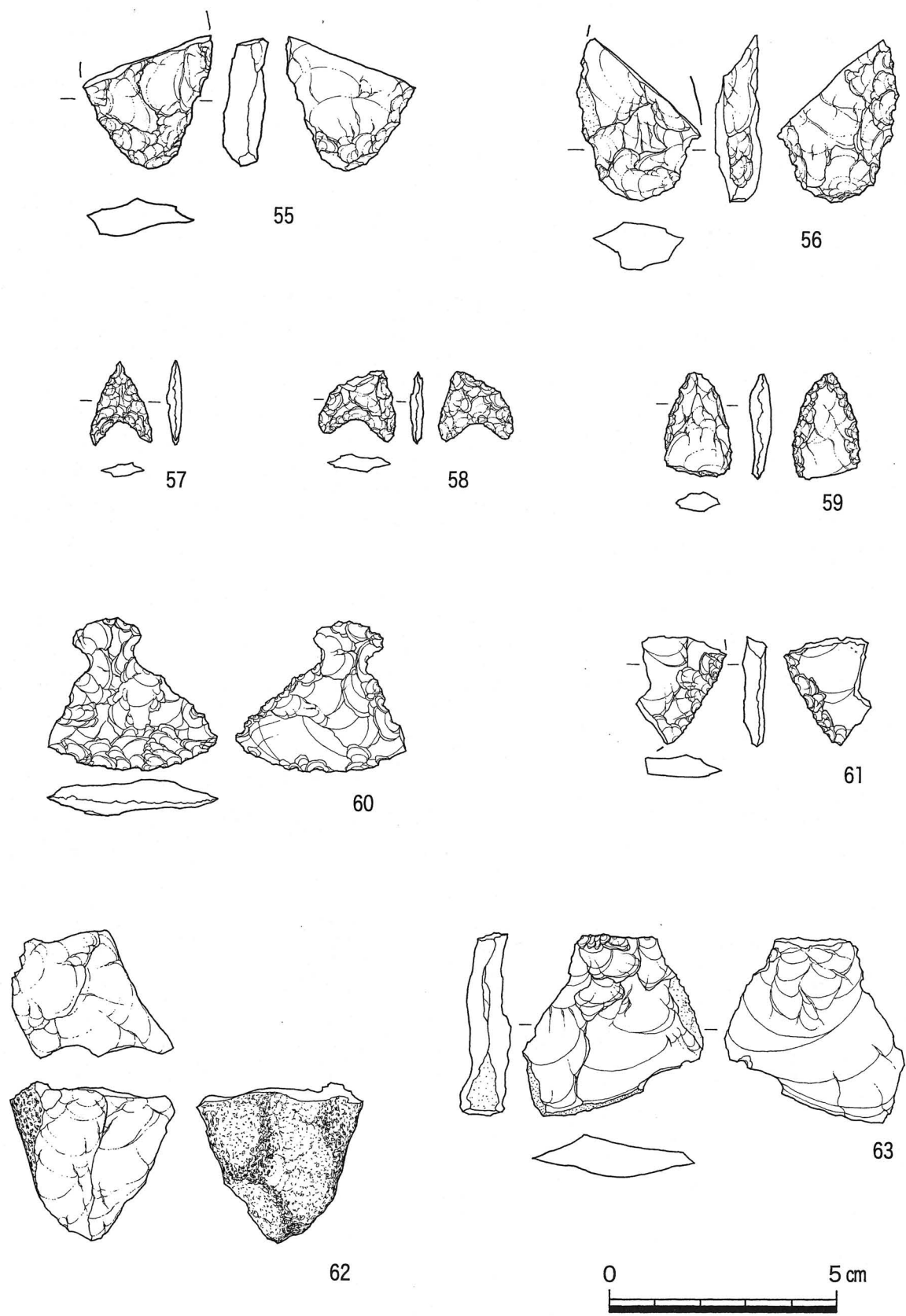
第8図 IV層出土の石器

当該期に属する石器は、石鏃16点、石鏃未製品1点、楔形石器1点、石錐1点、未製品1点、スクレイパー2点、剥片8点、碎片多数、石核1点である。石鏃がきわめて多いことが指摘できる。ほとんどの石鏃が縄文後期～晩期の包含層であるIV層より出土しており、当期の遺物として扱う。しかし、形態的には33・41の2点は返しが発達しない点、基部から両側縁が平行に走り、上方で屈曲点をもって尖部を作り出す点など他のものと異なり弥生時代の石鏃の特徴を持つ。石材は31・32・37の3点がチャート岩、他は下呂石を用いている。基部は有茎のものが主体を占め(31～42)、粗い作りの平基鏃が2点みられる(44・45)。図示しなかった1点も下呂石の有茎鏃である。43は基部を欠損しているが、両側縁が平行して走ることから33・41と同じタイプかもしれない。37～40の4点は基部が大きく広がる幅広のプロポーションをしており、1側縁(37～39)もしくは2側縁(40)で表裏のバルブを重ねて鋸歯縁としている(37も鋸歯縁こそ発達しないが、バルブを重ねていることから鋸歯縁を意図しているにとらえて良いであろう)。

46は表裏全面を粗い剥離が覆う。石鏃の未製品であろう。下呂石製で、風化は進んでいる。47は上端より深い剥離が、下端には潰れ状の剥離がみられる楔形石器。石鏃未製品を転用したものか。下呂石製。48は右側縁を折断と微細な剥離、左側縁は剥離によって尖部を作り出した石錐で、先端には摩耗がみられる。流状構造の発達した下呂石製。49は全面が剥離に覆われた石鏃もしくは石錐の未製品。両側縁に微細な剥離がみられることから楔として利用された可能性もある。側縁からの打撃により欠損するが、製作時の打撃によるものか楔として利用した際の剥離かのいずれかであろう。下呂石製。50は粗質の頁岩製剥片の端部両面に剥離を施したもの。葉理の発達する石材であり剥離はステップフレイキングとなるが刃部を作出しておりスクレイパーとしてとらえられる。粗質の頁岩は妙見谷の底に露出する中・古生層美濃帯の堆積中にもみられる。51は左側縁上部に腹面から急角度の調整を加え、下半には背面側に平坦な剥離を加えた後背面から急角度の剥離を施す。右側縁上部は折損。下半部は背面側への折断の後、折面よりやや急角度の剥離を施す。下呂石製。52・53は剥片。図示しなかったものも含めて剥片は打面が小さく薄い。石鏃の素材として適当なものが多いといえる。52は下呂石製。53は黒曜岩製。微細な剥離が1側縁にみられるが切り合いはランダムである。黒曜石の剥片はほかに2点出土している。透明で帯状に黒が入る。54は石核。大きな剥離と折断によって適当な大きさ、形状とし、打面、作業面を固定して剥片を作出している。下呂石製で、風化は浅い。

剥片、石核が少なく碎片が多いことから、遺跡内には剥片、未製品を持ち込んで石鏃の最終調整、もしくは使用した石鏃のリダクションといった作業が行われていたと考えられる。未製品も1点みられるが、特に32・33・34・36・38など頂部からの剥離がみられるものも多く持ち帰られていることから後者の作業がさかんであったことが想定できる。

石材は下呂石の利用が主である。石器は石鏃、碎片などが多く礫面が観察できるものは少ないが、節理面はみられるものの円礫の転磨面を有するものはなく、露頭より採取したものが多いと考えられる。馬瀬川は遺跡から直線距離で10km余り下ったところで飛驒川と合流し、飛驒川では円礫も採取できる。一方、遺跡から急峻な山を越えればやはり10kmほどで湯ヶ峰の下呂石露頭へ



第9図 V層出土の石器

到達することもできる。岩陰を利用した狩猟者達の移動経路に下呂石露頭が組み込まれていたのか、飛騨川、馬瀬川流域の遺跡を経由して持ち込まれたのかは飛騨川、馬瀬川下流域の遺跡の様相が明らかにならないことには明言できない。しかし、長良川上流域に持ち込まれている下呂石は露頭採取のものが主であり、その間に位置する当遺跡にもたらされる下呂石も、スポット的に露頭からもたらされたものと考えなければならない必然性はない。むしろ長良川上流域に下呂石がもたらされる経路として当地域があったと解釈することが妥当であるように思われる。

(4) 縄文時代早期～中期の遺物 (V層出土の遺物)

2 トレンチではV層まで掘削していないため、1 トレンチのみで確認された。遺物量はIV層と比べて減少し、V層下部ではほとんど出土しなくなる。

24～27は押型文土器。24・26は楕円文、25・27は山形文が施文されているが、いずれも別個体である。いずれも小片で、原体の単位などは不明である。24・25の文様は凹凸が深く刻まれ凸部の頂部は尖り気味であるが、26・27は浅く頂部は平坦である。いずれも器厚5～7mmと薄手で、25には黒鉛が含まれる。沢式に位置づけられる。28の外面にはへら状の尖った工具でえぐるように施された刺突が横位に並ぶ。胎土には繊維を含む。V層からは、2点のみであるが中期の土器片も出土した。

55・56は尖頭器未製品の基部であろう。いずれも打面を基部とし、側面からの加圧によって上部を折損する下呂石製。55は腹面右側縁と背面全面に粗い剥離が施されている。風化が激しく、稜が摩滅する箇所もある。56も背面を中心に粗い剥離が施されている。57・58は下呂石製石鏃。いずれも調整剥離は薄く丁寧に整形されている。58は被熱しており、裏面左脚部は飴状の肌を見せクラックが入る。59は未製品であろうか。調整剥離は深くまでおよばない。60はつまみつきスクレイパー。チャート岩製。61もチャート岩製スクレイパー。両面に剥離が施される。被熱により亀甲状のひびが見られる。割れも被熱によるものであろう。62は下呂石の石核。亜角礫を用いている。剥離面を打面として1面に作業面を設定している。被熱による割れが見られる(図面は接合した状態)。63はチャート岩製剥片。

石材は下呂石が主であるが、後期と比べるとチャート岩の割合も高い。チャート岩は妙見谷の谷底でも採取できるが、石器素材となる良質なものは少ない。下呂石も転磨面を有するものが見られ、飛騨川の転石も利用していたようである。

いくらかの石器には被熱の痕跡が認められるが焼土などはみられない。

7 まとめ

今回の調査で得られた成果は次の5点に要約できる。以下に列挙してまとめとしたい。

①岩陰の利用は縄文早期から

今回の調査で押型文土器が出土した。黒鉛入りのものもあり沢式に位置づけられよう。それ以下は岩陰形成以前に堆積したと考えられる崖錐堆積である。

②縄文後期～晩期の利用

今回の調査では、縄文時代後期～晩期の資料が最も多く見つかった。この時期には石製土掘り具などが増加し、食物として植物の利用度が高まる。金山町内の祖師野遺跡でも同様の傾向が認められた。しかし、岩屋岩陰遺跡ではそうした植物採取、加工の道具は一切見られず、石鏃が多く出土している。また、出土する土器片も無文の粗製土器がほとんどであった。こうしたことからこの時期においても狩猟のキャンプ地として岩屋岩陰が利用されていたと考えられる。縄文社会を考えるうえで貴重なデータを得ることができた。

③金山町ではじめて確認された弥生時代遺物

今回の調査では、金山町ではじめて弥生時代の遺物が確認された。弥生時代の土器片とともに穿孔磨製石鏃が見ついている。岩屋岩陰は、弥生時代には何らかの儀礼的な場にもなっていたようである。金山町に限らず益田郡内には弥生時代の遺跡は少ない。しかし萩原町でも銅鐸が出土しており、遺跡の数に比して祭祀的な遺物の割合が高い。

④江戸時代以降は信仰の場として

岩屋岩陰には明治維新の前から妙見神社が祀られていた。江戸時代には整地をして岩陰前面に平らな場所を作り社殿をおいたようである。しかし義平の伝承が残る中世においては、利用の痕跡は認められなかった。

⑤岩陰の快適さ

調査を行ったのは2月下旬、冬の終わりのまだ寒い季節ではあった。しかし、岩陰内は風も吹き込まない快適な空間であった。

参考文献

金山町教育委員会 1975 『金山町誌』

『日本歴史地名大系21岐阜県の地名』1989 平凡社

金山町教育委員会 1985 『祖師野遺跡』

伊藤秀雄ほか 1998 『丸山遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター

河野典夫 1985 「弥生式土器」『阿曾田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会

抄 録

フリガナ	イワヤイワカゲイセキ ハックツチョウサホウコクシヨ
書 名	岩屋岩蔭遺跡発掘調査報告書
編著者名	長屋幸二 富田真一郎
編集機関	金山町教育委員会
所在地	〒509-1695 岐阜県益田郡金山町大船渡600番地の8
発行年月	平成14年3月

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
イワヤイワカゲ 岩屋岩蔭	カナヤマチヨウイワセ 金山町岩瀬 タカヒラ 高平	G22K	01033	35度 45分 05秒	137度 9分 45秒	20010219) 20010302	6 m ²	遺跡の性格を 把握するため の確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
岩屋岩蔭遺跡	岩陰	縄文早期		土器、石鏃、尖頭器	石鏃が石器組成の主 体を占め、岩陰利用 のあり方が明らかと なった。当地域では 貴重な弥生の資料
		縄文後期 晩期		土器、石鏃、楔形石器、 スクレイパー、剥片	
		弥生		土器、穿孔磨製石鏃	
		近世	整地・被熱	寛永通宝、搦鉢、拳骨茶碗	

岐阜県指定文化財・史跡

岩屋岩蔭遺跡発掘調査報告書

年代や包含層確認のための緊急発掘調査

2002年3月発行

編集・発行 金山町教育委員会

〒509-1695 岐阜県益田郡金山町大船渡600-8

TEL0576-32-3893 FAX0576-32-3336

